

第一章を読む

(↑上の文字をタップしてください)

でも、この時はまだ知らなかつたんだ。
この後、ぼくはもつともつと後悔させら
れることになるというのを！

(第一章 おしまい)

*この続きはお買い求めの上お楽しみください。

* Amazon くはごちらからどうぞ 

て思い直した。だって、食堂に入るとテーブルの上には、イチゴジャムをつける予定のトーストと、ケチャップのかかったプレートンオムレツが待っていたからだ。それを見ると、（これをゆっくり味わわない手はないな）って思えてきた。

そうしてご飯を食べ始めると、罪悪感も徐々に薄らいでいった。ほんと、ぼくはなんてだらしないやつなんだろう。

なかつた。

リコは、「分かつた、早く来てね」つて言い残すと、顔を伏せて玄関から出ていった。その寂しそうな背中を見ると、ぼくはますます後悔した。

——ああ、おれはなんてひどい人間なんだ！ リコのやさしさに甘えたり、リコの気持ちに踏みこみたりして。でも、すぐに（しようがないかな）っ

た。子犬が母犬のおっぱいをもらえなかつた時の顔だ。その顔を見て、ぼくは少し意地悪な快感を覚えた。

——分かったろ？ リコ、おれはだしらない人間なんだよ。

その一方で、少しだけ後悔もしていた。

——やっぱ、リコにはやさしくしてあげなきゃいけないかな……

でも、もう遅かった。もう後には引け

な曇らせ方ではなく、とてもがっかりしたような曇らせ方だった。リコは、ぼくと一緒に登校することをとても楽しみにしていたんだ。

ぼくにはそれが分かってた。それが分かかってて、あえて意地悪をした部分もあった。リコの信頼を、もう少し軽くしようとするためだ。

案の定、リコはとても悲しげな顔をし

てしまったんだ。

「ごめんリコ、おれ、今起きたばっかりなんだ。まだご飯も食ってないし。だからさ、悪いけど先行つててくれる？　それで、小屋の掃除、始めといて。おれも、後から急いで行くから。うん、飯食ったら速攻で駆けつける」

それを聞くと、リコは瞬間的に表情を曇くもらせた。それは、ぼくを非難するよう

お母さんにも（そしてお父さんにも）、
「リコちゃんに甘えてはいけませんよ」
って普段から言われている。リコはやさ
しい。ぼくが頼めばなんでも引き受けて
くれる。そしてだからこそ、それに甘え
ちやいけないってことは、ぼくにも分か
ってたんだ。

でも、やっぱり、どうしても、ああ、
この日の朝も、ぼくはまた、リコに甘え

他の女子だったら、こうはいかない。その場合はぼくも諦めて、頑張つて四十五分前に学校へ行つてたと思う。

でもリコは、「ごめん、小屋の掃除やっついてくれる？」と頼めば、きつと文句も言わずに「うん」とうなずくだらう。

ぼくにはそれが分かっていた。でも、だからこそ、それに甘えたくなかった。

そこで束の間^{つかま}、考えたんだ。動物の世話を取るか、朝ご飯を取るか。そうして結局、朝ご飯を取ることに決めちゃった。リコと一緒に日直をやることになった時、こうなる予感はなんとなくあった。リコに甘えちゃって、仕事を押しつけてしまおう予感。

リコはきつと、ニコニコと笑っていやとは言えないだろう。

った。早起きして学校へ行くのがどうにも面倒くさくなつた。

この時、時計の針はもう七時四十分を指していて、本当は家を出なければならぬ時刻だつた。でもぼくは、起きたばかりのパジャマ姿で、このまま速攻で着替えれば出られないこともなかつたんだけど、それじゃ顔も洗えないし、ご飯も食べられない。

そうすれば早起きしなくちゃならないで
しよ？ そうやって、早起きすることの
気力を自らに奮い立たせようとしてたん
だ。

4

だけど結局、いざその朝になつてみる
と、そんな気力はへなへなと萎しぼんでしま

たのだ。

日直になるのは今年二回目だったけど、ぼくはこの日直が苦手だった。チャボやウサギの世話をするのも面倒なんだけど、早く起きななきゃならないのがつらかった。特に、《春眠曉を覚えず》なこんな朝は、それはもはや拷問こうもんに近かった。

それでもぼくは、リコと約束したんだ。「一緒に学校へ行こう」って。だって、

散らすから、きれいに片づけるのには骨が折れる。

しかも、飼育小屋にはまた別の動物もいて（この動物については後で詳しく紹介する）、その世話もしなければならなかった。だから、たっぷり三十分はかかってしまっただけけれど、おかげで日直になると、その日の朝は少なくとも始業時間の四十五分前には登校する必要があつ

飼育しているチャボやウサギの世話をするといふ仕事が課せられていた。これは、担任の日高^{ひだか}先生が飼育担当教諭だったことからはそうなっていたんだけど、この世話をというやつがけっこう面倒くさかった。エサをやるだけなら簡単なんだけど、それと一緒に小屋を掃除しなければならぬのがやつかいなんだ。チャボもウサギも、小屋中とところかまわずフンをまき

一緒に登校するのを諦めて、一人あきらで登校するようになった。ぼくは遅刻の常習犯だけど、リコが学校に遅刻したのは六年生になる今日までこの時一度きりだから、その件では少し悪いことをしたと思っっている。

この日は、だから久しぶりの一緒に登校になるはずだった。

うちのクラスの日直には、毎朝学校で

としたんだけど、校門手前の最後の登り坂で息を切らして、階段を二段跳ばしで駆けあがるぼくについてくることができずに、大きく後れを取った。

それでぼくも、さすがに置いてけぼりにするわけにもいかなかったので階段の上のところで待っていたのだけど、おかげでその日は二人とも遅刻してしまった。

そのことがあつて以来、リコもぼくと

でもリコは、ぼくのように走ったりダ
ツシユしたりすることができない。片目
が見えないこともあるんだけど、運動神
経ももともと良くない。だから、早く歩
いたり走ったりすることが苦手なんだ。

その朝、試しにぼくと一緒に登校して
みたりコは、下り坂で加速したり、信号
の手前でダツシユしたりできなかつた。
それでも頑張つてなんとかついてこよう

ど、ぼくに合わせて始業の十分前に一緒にアパートを出たことが一度だけあった。でもその時は、二人とも遅刻してしまった。理由は、リコの歩くスピードが遅かったことだ。

ギリギリに家を出るぼくは、歩くのはいつも早歩きだ。時にはちよつと走ったり、信号の手前ではダツシユしたりもする。

うギリギリに着くようになつた。

そうになると、勤勉で実直なりコとは時間
間が合わなくなつた。リコは今でも一年
生の子がそうするようになり、三十分前には
必ず学校に着くようにしている。

リコは最初、別々に登校することを寂
しく思つて、ぼくの時間に合わせようと
したことがあつた。ぼくらのアパートか
ら学校までは歩いて十分くらいなだけで

ろいろあつて、一つには、女子と一緒に歩くのが恥ずかしくなつたということもあるけど、一番大きいのは、ぼくが朝寝坊になつたことだ。

ぼくは三年生の頃から段々と朝寝坊になつて、決まつた時間に起きられなくなつた。学校へは、それまでは余裕を持つて始業の二十分前に着いていたのが、やがて十分前になり五分前になり、とうとう

めてだった。

「じゃあ明日、一緒に学校行こうぜ」
そう言うのと、リコは嬉しうれそうにニコニコと笑って「うん」とうなずいた。

リコとは、昔は毎日一緒に登校していた。確か四年生の春まではそうしていた。でもその頃から、段々と別々に登校するようになった。ようになっていった。

別々に登校するようになった理由は

一緒に学校へ行く約束をしたのは、昨日だった。今日、ぼくはたまたまリコと一緒に日直をやることになっていた。

ぼくとリコは、今年からまた同じクラス（六年間で通算三回目）になっているけど、日直を一緒にやるのはこの日が初

なっているんだ。

この日も、そんな意地悪心がむくむくと湧きあがってきた。リコの子犬のような顔を見ていると、その期待を裏切つてやりたいという乱暴な思いに駆^かられる。そういう悪魔な心が、ぼくの中にはある。だからぼくは、その朝、リコに向かつてこう言った。

「ごめんリコ、先に行つててくれる？」

置こうとしている。話しかけられても素^そつ気^けない態度を取ったり、小さな約束を破ったり。そうやって、リコの信頼をちよつとずつ打ち砕^{くだ}こうとしている。

（ぼくのことを無条件に信用するのをやめてもらいたい。リコの重たさを、なんとか軽くしたい）

そんな思いから、ぼくは最近リコに（少しだけだけど）意地悪をするように

て首を振る。

「ランくんは、信用される人間だよ」

リコは、胸を張ってそう答える。そう答える時のリコは、いつもものおどおどとしたリコらしくなく、自信満々気である。

そう言われると、ぼくとしても何も言えなくなってしまう。リコは、とにかくぼくのことを頭から信じ込んでいるのだ。だからぼくは、最近少しリコと距離を

うにも煩わしく感じるようになってい^わら^らず。

——そんなに信用するなよ。

最近、リコにそう言いたくなることがある。

——おれは、そんなに信用される人間じゃないぜ。

実際、何度かそう言ったこともある。

そんな時、リコは一瞬キョトンとした顔をすするけれど、すぐにニコニコと笑っ

からということもあるけど、それだけじゃない理由もある。その理由は……もう少し後で書くことにするけど、でもとにかくリコは、ぼくを心から信頼しているんだ。

そのことが、最近はしかしちよつと重荷にもなっている。最近、リコのこの子犬顔がなんだか疎ましい。ぼくは、ぼくを無条件に信用しきっているリコを、ど

さと出かけていった。

後にはぼくとリコが残された。ぼくはリコを見た。するとリコも、ニコニコとした笑顔でぼくを見ていた。

リコの笑った顔は、なんだか子犬っぽい。尻尾しっぽを振ってすり寄ってくる時の子犬の顔だ。とてもかわいい。

リコは、ぼくのことを信頼している。信頼しきっている。それは、幼馴染みだ

「じゃあお母さん、仕事に行つてくるからね」と言つて、お母さんは、まだ着替えすら済んでないぼくを残して出かけていこうとした。リコが「行つてらっしゃい」と声をかけると、お母さんはニッコリ笑つて「行つてきます」と答えた。それから、今度は一転厳しい表情でぼくをにらむと、「リコちゃんを待たせるんじゃないわよ」と低い声音こわねで言い、そそく

「いつそ、寂然じやくぜんとした美しさを醸かもし出し
ている」と言っただのもお父さんだけど、
どういう意味かはよく知らない。けど、
リコの顔のきれいさを表すのにはぴった
りの言葉に思え、ぼくはこの「寂然」と
いう単語を、リコの顔とセットにして覚
えている。ただ、お父さんからは「リコ
ちゃんには言うなよ」って言われている
ので、言っただことではないけど。

バランスの、誰が見てもきれいと言う顔だ。「きれい」という言葉はリコのためにあるんじゃないかと思うくらい、リコの顔はきれいなのだ。

そんなきれいな顔なのに、リコの右目は瞳が白く濁っっていて、いつも右斜め四十五度を向いている。でも、そんな変な目もまた、リコにはなぜか似合ってるんだ。

が言う前から、ぼくも秘ひそかにそう思はつていた。ただ、口に出して言うのは恥はずかしかつたので、言わなかつたけど。内心では、（リコほどきれいな顔立ちの女の子はこの世にいないんじゃないか）とさえ思はつていた。

リコは目鼻立ちが整とつていて、すごくきれいな顔をしている。それも「かわいい」と「美しい」の間くらいの、絶妙な

よつと右にかしげ、左目だけでぼくを見ながら「お早う」と言つて、ニコニコと笑つた。

ぼくも「お早う」と返事をしてリコの顔を見た。起き抜けで目の焦点しょうてんがなかなか合わなかつたけど、リコの顔はいつもと同じでとてもきれいだった。

「リコちゃんの顔はきれいだね」と最初に言つたのはお父さんだ。でもお父さん

話す。ちやんとその人の目を見て話す。むしろ、普通の人よりまじまじと見る。ぼくよりも全然見る。お母さんなんかは、「あなたもリコちやんのように人の目を見て話しなさい」と、よく引き合いに出すくらいだ。

人の顔を見る時、リコは左目しか見えないから顔を少しだけ右の方にかしげる。この日もリコは、いつもものように顔をち

四十五度を向いている。

リコの下を向くくせはこの目のせいだ。リコの目は、ちよつと見ただけで変だつて誰でも気づくから、初めて見た人はギョツとした顔をする。リコは、そのギョツとした顔がいやで、だからあんまり人に顔を見せないようにしている。彼女の下を向くくせは、このことからきている。でもリコは、馴れた人には顔を向けて

リコは片目しかない。正確に言うのと、右目が見えない。

幼い頃（それはぼくと知り合う前らしいんだけど）、リコは、リコのお母さんがちよつと目を離したすきに公園の植え込みかなんかに突っ込んでいって、その時、つつじの枝を右目に刺して失明しちゃったんだ。だから、右目の瞳は左目と比べると白く濁にごっていて、いつも右斜め

廊下のすぐ向こうがもう玄関なんだけど、リコはそこに突っ立って下をうつむいていた。リコのいつものポーズだ。リコは、いつも下を向くくせがある。

ぼくが部屋から出てくると、リコは顔をあげた。そして左目だけでぼくを見るのと、ニツコリ笑って「お早う」と言った。右目は、いつものように右斜め四十五度を向いていた。

った。

だからぼくは、物心ついた時にはもう
リコが隣にいて、何をするにも一緒だっ
た。一緒に遊んだのはもちろん、幼い頃
はよく一緒にお風呂に入った。一緒にも
寝た。そんなリコは、ぼくにとって幼馴染
染みというより兄妹に近い。

リコとの約束を思い出して、ぼくは仕方なく起きあがった。部屋を出ると短い

十年のつき合いになる。文字通り「幼馴おさなな染み」というやつだ。

ぼくとお母さんは、ぼくが二歳の時にこのアパートに引っ越してきた。その時、向かいの部屋に住んでいたのがリコの一
家だ。

お母さんとリコのお母さんは、赤ちやんを抱える者同士自然と親しくなつて、ぼくとリコとのつき合いもそこから始ま

そうだ、思い出した。今日ぼくは、リコと一緒に学校に行く約束をしてたんだ。

2

リコは、ぼくが住んでいるアパートの向かいの部屋に住んでいる同い年の女の子だ。ぼくとリコの馴れ初めは古くて、お互い二歳の時から知ってるから、もう

さんは「リコちゃんが迎えに来てるわよ」と言つて、ぼくの部屋の戸をガラリと開けた。ぼくはそれに気づいていたけど眠った振りをしていたら、お母さんは布団をひっぺがすという実力行使に出た。

「リコちゃんが迎えに来てるわよ！」
今度は、さつきと違つた少しきつい口調で言つた。

——リコ？

った。ウーンと寝返りを打ってシーツに額ひたいをたいごりごりと押しつけたら、これがどうしようもなく気持ち良ためいきくって、それですうず思わず「ああ」と溜息ためいきをもらして枕に顔を深々と埋うずめたら、いつの間にかうつらうつらとしてきちゃって、気がつくともまた、もとの浅い眠りに舞い戻もどっていたんだ。

二度目に呼ばれたのは七時半だ。お母

「朝ですよ」というお母さんの声が最初に聞こえたのは、たぶん七時だ。お母さんは仕事に行くから毎朝六時には起きてるけど、化粧や朝ご飯の準備を済ませてからぼくを起こすのは、いつも七時と決まっている。

お母さんの声に気づいたぼくは、口では「ハイイ今起きるよ」って返事をしたけど、なかなか起き出すことができなか

屋に漂っている空気の少し冷たさを感じさせるカラツとした肌触りがほつぺたに心地良くつて、だからくるまった布団の温もりがまたこのうえなく気持ち良くつて、八時間眠ったばかりだけど「もう八時間眠れますか？」と聞かれたら自信を持って「はい眠れます」と答えられそうだな、そんな勢いの眠たさだったんだ。まさに《春眠^{しゅんみんあかつき}曉を覚えず》というやつだ。

るきっかけをなかなかつかめずに多少は夜更よふかしたものの、それでも十時半にはベッドに入ったから、少なくとも八時間は寝たはずだった。

それでも、ぼくはベッドから起き出すことができなかつた。だってその朝は、なんと言うか、二度寝するにはもつてこの朝だったんだ。

五月半ばの木曜日は天気も快晴で、部

第一章 事件の日の朝

1

その日もぼくは眠かった。

そりゃあ確かに昨日は解きかけの『フ
イナル・フアンタジーVII』を終わらせ

チャボとウサギの事件